



图 22. ⑫「昌圖」(秘) (5 万分 1)

原图×0.53。

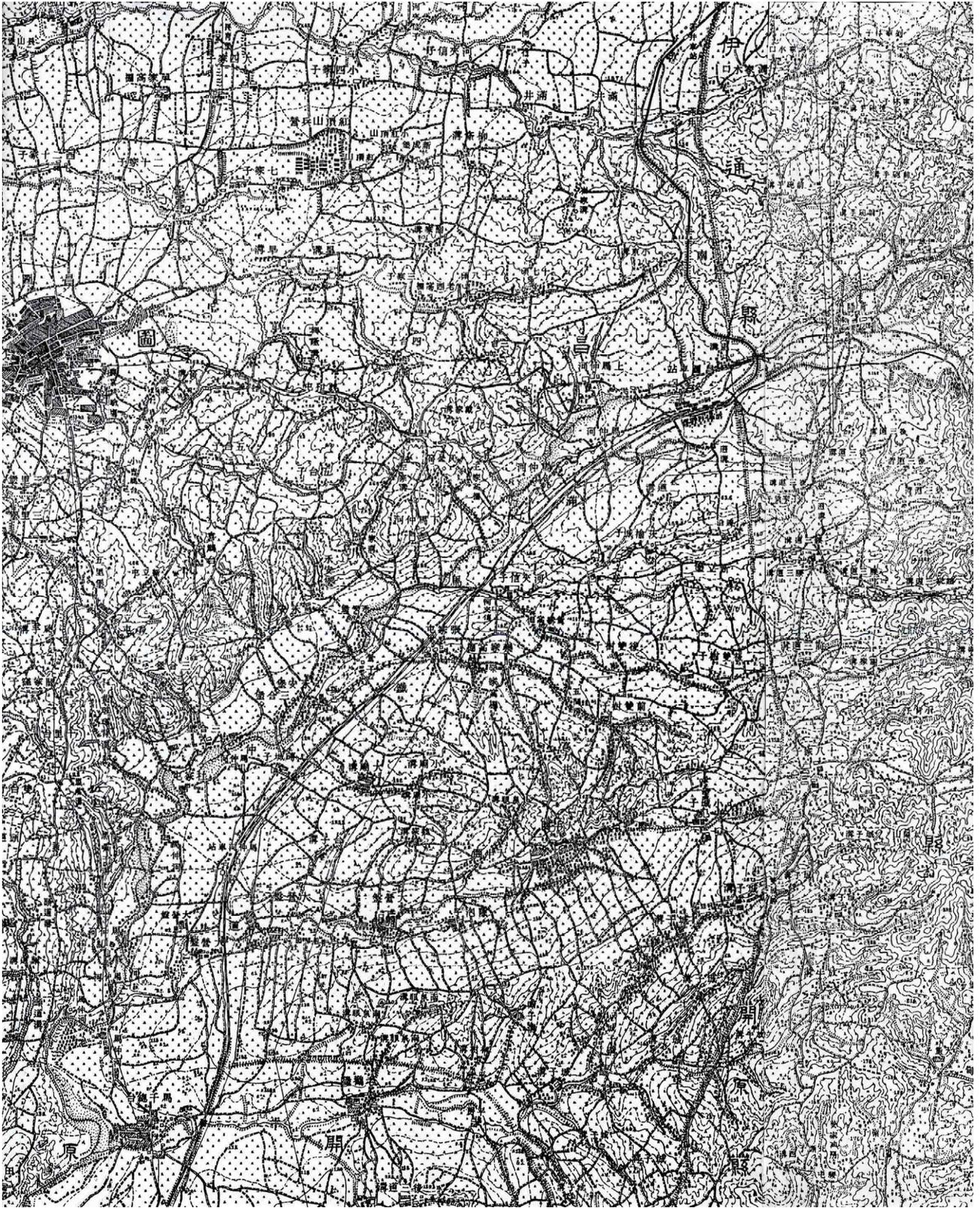


图 23. 昌圖 (5 万分 1 地形图「昌圖縣」、「威遠堡門」图幅)

原图×0.57。

出典：陸地測量部作製 (1985) (1933 年製版)。

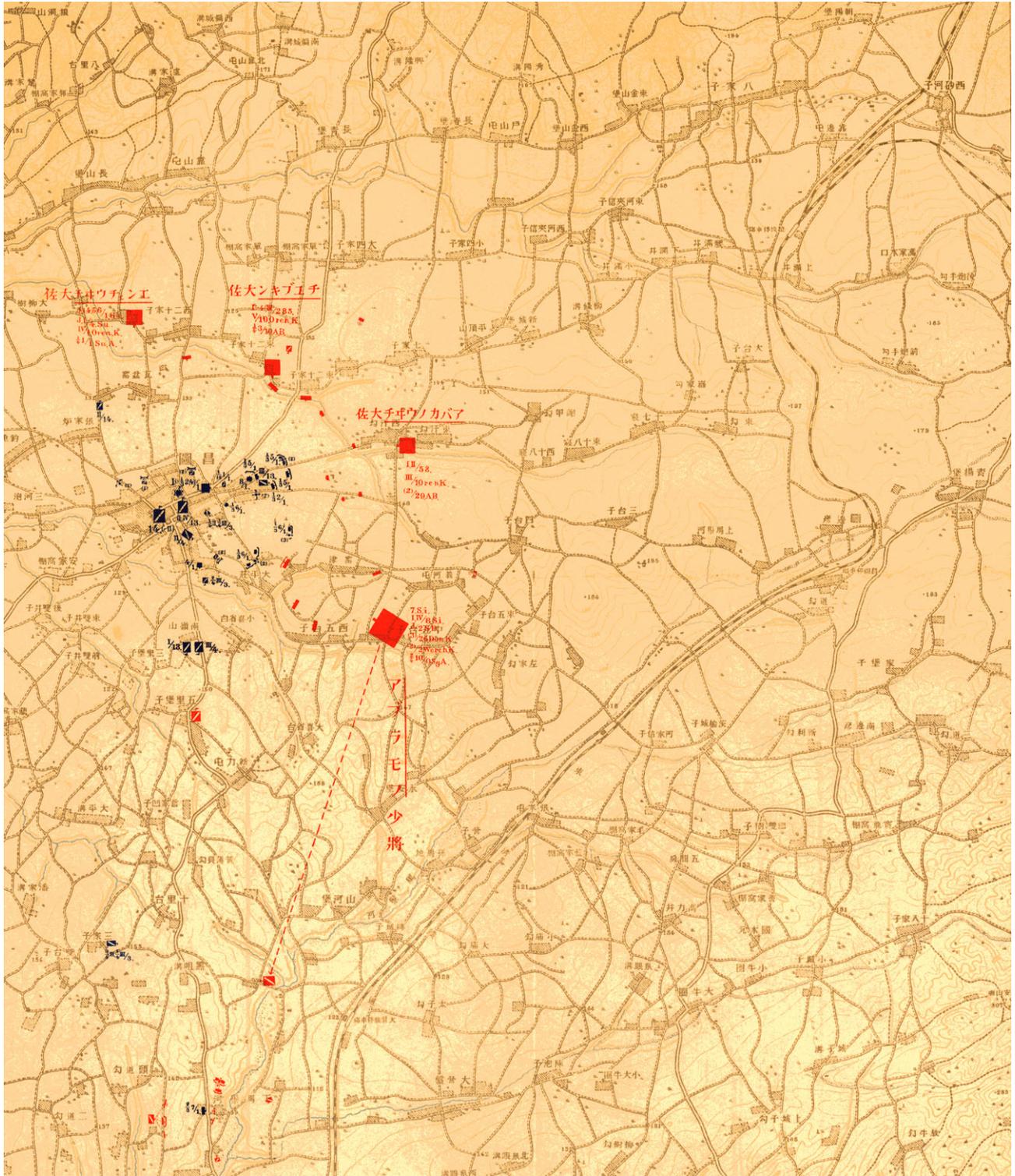


図 24. 昌圖附近秋山生田目両支隊之戦闘 (1905 年 4 月 23 日正午頃)

原図 (5 万分 1) × 0.56。

出典 : 参謀本部 (1914b) の附図第四。

2008: 18) であり、臨時測図部の測図手は中国語が少し話せていたのがわかる。また、臨時測図部第二期には通訳の人員もいたので、現地の中国人に集落名について訪ねながら、地図を完成していたと推測できる。

⑪「威遠堡門」(秘) および⑫「昌図」(秘) は、比較的精密な地図であり、それぞれ図 21 および図 23 と近似度が高い。これらの地図を基に再測量をくわえ、図 21 および図 23 が作製された可能性も考えられる。

つぎに昌図付近での戦闘について、記しておきたい。日本軍が昌図を占領したのは、1905 (明治 38) 年 3 月 22 日である (参謀本部 1914a: 3-4)。そのご 4 月になってさらに北方に進出するが、南下するロシア軍と衝突し、主力を昌図に後退させることとなった (参謀本部 1914a: 30-31, 38-47)

4 月 22 日朝から、ロシア軍は昌図を包囲することを目的に、昌図の北方から漸次南進しており、午前中、昌図停車場東北高地、上下満井、靠邊屯および八家子、東汗勾の附近に達した (参謀本部 1914a: 62-64)。

秋山少将はロシア軍の南進を知り、歩兵第一聯隊 (第三大隊欠) と共に昌図を固守することを決意し、機関砲、騎砲兵各一小隊を陣地に配置した。また生田目中佐は諸隊を集め昌図東端陣地におき、歩兵第五第六中隊の各一小隊を昌図東端に配置した。そして、機関砲二門は同村東端陣地におき、歩兵第五第六中隊の各一小隊は散兵壕におき、対戦準備を行った。

午後、西汗勾および七家子附近のロシア軍の騎兵が日本軍を射撃したが、夕方には兵力を増加し、さらに十七寝の東北に前進し、2、3 百の歩騎兵のロシア軍が昌図停車場附近に侵入した。そのため、日本軍は張家屯、五台子、東二十家子、瓦盆窑、馬千総台附近を固守した。そして、秋山支隊と生田目支隊は依然昌図附近を固守した。

翌日、朝 6 時頃ロシア軍の騎兵約二中隊は西砂河子方向より西金山堡を通過し西進し、さらに東二十家子より昌図東北端に向かい攻撃し、5、6 百人のロシア軍は七百子に至る。そして、西砂河子のロシア軍は続々と南進し昌図停車場附近に至っては昌図に

向かって前進した。ロシア軍の一部は東汗勾、西汗勾、東二十家子、西二十家子の附近に砲二門をおき、昌図および東北丘阜および東北端角面堡に向かって射撃しはじめた。秋山支隊は騎砲兵を昌図の北端と西北端に配置し射撃を行った。機関砲二門は昌図の東端および東北端の陣地におき、一部兵力は昌図東南端におき生田目支隊とともに、ロシア軍と交戦した。

4 月 24 日、両軍は再び交戦するが、4 月 25 日ロシア軍は昌図以北の蓮花街、西砂河子、興隆泉、四方台および二小屯の線に退却する (参謀本部 1914a: 70-79)。

この戦闘の一部は、本図の測図エリア内で行われている。この点を考慮すると、本図のための測図がこのロシア軍の攻勢の前に行われたものか、後に行われたものか関心が引かれるが、両者の可能性があるとしておきたい。なお、5 月 18 日以降にも、ロシア軍の小攻勢があったが、大きな変化はなかった (参謀本部 1914a: 150-152)。

上記ロシア軍の攻勢に関連して、日露両軍の配置を描いたのが図 24 である。⑫「昌圖 (秘)」と非常に似ており、同図は同系の図をもとに作製されたと考えられる。

### ⑬ 「昌圖停車場附近補足圖」(20 万分 1) (図 25)

本図の縮尺は 20 万分 1 で、他の図と比べて小さい。右肩に「本圖ハ騎兵第六聯隊ノ測圖ヲ基トシテ調整セル者ニシテ総司令部二十万分一二貼付スヘキ者トス」と述べている。総司令部が作製した 20 万分の 1 が各部隊に配布されており、それを補足する図として第四軍参謀部が作製して配布されたものと想定される。検討をくわえていないが、本図群には、小縮尺の 20 万分の 1 図が他にも含まれており (表 2)、これらと組み合わせて使用されたものであろう。

1905 (明治 38) 年 4 月下旬、日本軍の戦闘力はほぼ回復し、満洲軍総司令官は 5 月の準備として、各軍に作戦計画に関する命令を下していた。第四軍の任務は、新家屯、および開原の前線以北に進み、先進支隊をもって威遠堡門附近を占領することであった (参謀本部 1914a: 89)。そこで、第六師団は 5 月 4 日、騎兵第六連隊に歩兵第十三連隊を附して小城子

# 昌圖停車場附近補足圖

(一分万十二)

本圖ハ騎兵第六聯隊ノ測圖ヲ基トシテ請製セル者ニシテ  
 總司令部二十万分一二貼付スヘキ者トス

明治三十八年五月



第四軍參謀部

図 25. ⑬「昌圖停車場附近補足圖」(20 万分 1)

原寸大。

明治三十八年五月 第四軍參謀部

(昌圖停車場以西) 附近におき、北方の四平街方面のロシア軍の状況を搜索した。その後、第六師団の独立騎兵は長江支隊と改称し、5月15日南邊彦附近に移り、また騎兵第六連隊の一中隊を昌圖停車場北方

高地に派遣して北方にいる露軍を警戒した。5月19日には、昌圖停車場附近において、長江支隊は南進したロシア軍と苦戦し、一時的に占領されていた昌圖停車場を奪回することになった(參謀本部 1914a: